

吉備国際大学研究紀要  
(人文・社会科学系)  
第29号, 103-108, 2019

## 科目等履修生（外国人留学生）に対する日本語教育の展開

片山 章郎

### The Development of Japanese Language Education for Non-degree International Students

Akio KATAYAMA

#### Abstract

The author of this paper has been teaching non-degree international students, who receive Japanese language education for a half semester before enrolling at Kibi International University. The average Japanese language proficiency of the students at the start of the course is as follows: approximately 10% are at the N2 level, 30% are at the N3 level, and 60% are at the N4 and N5 levels. 95.7% of the students are from non-kanji using backgrounds. The students take eight of the courses related to the Japanese language.

They study Japanese vocabulary, grammar, reading and listening comprehension. In addition, they take one more course that includes basic exercises designed for international students, homework tasks of around 20-pages, and writing a Statement of Purpose for Admission.

In the class focusing on basic exercises, an original quiz booklet is used to study Japanese affairs. The main aim of the class is not for students to get correct answers on the quiz, but to improve their Japanese communication skills through discussing explanations of the correct answers, and events derived from the questions.

As students with non-kanji using backgrounds account for 95.7% of the class, homework comprises around 80% reading and writing of kanji characters and vocabulary, and 20% grammar exercises that include questions on postpositional particles. All students submit their homework every time, partly because the author checks if they have submitted it or not.

The students are required to take an examination to become an undergraduate student at Kibi International University six months later. As it is mandatory to prepare a Statement of Purpose for Admission, all students work together seriously to prepare their statement. This exercise is good for training both reading and writing comprehension.

**Key words** : non-degree students, international student, Japanese-language education

キーワード：科目等履修生，外国人留学生，日本語教育

## 1. プロフィール

### (1) 科目等履修生（外国人留学生）の人数と日本語能力

外国人留学生が吉備国際大学で日本語の授業を受講できるように、本学では2015年度秋学期より入学前の半期に日本語科目を履修する外国人留学生の科目等履修生（以下、外国人履修生と称す。）を受け入れており、筆者がチューターのような役割を担当している。（ただし、本学のアニメーション文化学部や心理学部への入学を希望する外国人履修生は除く<sup>注1</sup>。）筆者が担当する外国人履修生の人数は表1のとおりである。2018年度秋学期は当初の2015年度秋学期の約9倍にもなっている。また、非漢字圏の留学生がトータルで95.7%を占めている。

受講開始時の日本語能力は学期ごとにばらつきはあるが、平均すると日本語能力試験（日本語を母語としない人の日本語能力を測定するものとして活用されている試験）のN2レベル（論旨が明快な文章を読んで内容を理解でき、会話の要旨を把握することができる<sup>注2</sup>。≡日本の大学での授業が理解できるレベル）程度が約1割、N3レベル（日常的な場面で日本語をある程度理解できるレベル<sup>注2</sup>）程度が約3割、N4・N5レベル（初級レベル）程度が約6割である。

### (2) 履修科目

在留資格が「留学」で来日する外国人留学生は各学期において1週間あたり10時間以上の履修が必要なため、講義科目であれば7科目以上の履修が必要になる。そのため本学の外国人履修生は、「日本語IA」、「日本語IB」、「応用日本語IA」、「応用日

表1 科目等履修生（外国人留学生）の履修人数

年度	学期	人数	国別人数
2015	秋	6	ベトナム：3 インドネシア：3
2016	春	9	インドネシア：8 スリランカ：1
	秋	8	インドネシア：4 スリランカ：2 中国：2
2017	春	11	インドネシア：9 スリランカ：1 中国：1
	秋	26	インドネシア：16 スリランカ：7 中国：3
2018	春	26	インドネシア：12 ベトナム：10 スリランカ：3 オーストラリア：1
	秋	53	インドネシア：27 ベトナム：21 スリランカ：5

本語IB]、「日本語研究IA」、「日本語研究IB」、「吉備国際大学から世界へ（留学生）」、「基礎演習（留学生用）」という8科目を履修する。

さらに、合格するかどうかだけでなく、日本語能力の進歩度を測るために日本語能力試験のN2をできるだけ受験することを勧めており、かつその合格対策として特別補講も実施している。

「日本語I」、「応用日本語I」、「日本語研究I」の授業はAとBがあるが、2018年度春学期までAは春学期に、Bは秋学期に日本語能力に応じて正科生と一緒に上・中・初級の3クラスに分けて実施していた。2018年度秋学期からは外国人履修生の増加等

もあって、4クラス編成で実施している。クラス分けについては、入学式前のオリエンテーション期間にプレースメントテストを実施し、得点に応じて振り分ける。日本語能力に差はあるが、その他の5つの授業は外国人履修生のみでクラス分けせずに1クラスで実施していた。しかし、2018年度秋学期から「日本語 I A」, 「応用日本語 I A」, 「日本語研究 I A」は1クラスではなく、4クラス中の上位2クラスの上級と下位2クラスの初級の2クラスに分けている。クラス分けしないのは「吉備国際大学から世界へ(留学生)」と「基礎演習(留学生用)」である。

## 2. 外国人履修生への日本語教育の工夫

前述したように、本学では外国人履修生が半年後に吉備国際大学に入学して、日本語の授業を受講できるように日本語教育を実施している。そのため、日本語を冠した6つの科目の授業は語彙、文法、読解、聴解を中心に実施している。さらに、「吉備国際大学から世界へ(留学生)」は日常生活やキャンパスライフに必要な「読む」「書く」「話す」力を養成している。さらに、日本語教育のこのような授業以外に、筆者は基礎演習(留学生用)、20ページ前後の宿題、入学志望理由書の作成という3点を外国人履修生に実施しており、この3点によって外国人履修生が大学の日本語の授業をよりスムーズに受講できるように工夫している。

### (1) 基礎演習(留学生用)

日本語を学びたい外国人履修生を受け入れている大学では、日本語だけでなく、「日本事情」や「日本文化」といった科目も開講している。本学でも外国人履修生は「基礎演習(留学生用)」で、筆者が作成した4択形式の「クイズ 日本事情(岡山編)」という冊子を使って日本事情を学ぶ。ただし、本冊子は日本の生活事情、行事、スポーツ、文化、地理、簡単な歴史を扱うだけでない。吉備国際大学とその

関連校のことや、吉備国際大学の所在地である岡山県及び岡山県高梁市の地理、簡単な歴史、観光名所、名産品なども扱う。本授業は演習授業であるので、演習室で学生同士が対面する形の座席の配置で授業を実施している。クイズ形式にしているのは、正解を求めるためにグループで話し合うことを端緒にして、正解後の解説や問題から派生する事象を外国人履修生全員がお互いに話し合うことに主眼を置いているからである。

すなわち、クイズ形式の教材を使って外国人履修生同士が話しやすい座席配置にしているのは、外国人履修生の日本語によるコミュニケーション能力を向上させるためである。横山<sup>1)</sup>は外国人履修生と似た立場にある留学生別科生に対して、「N5レベルからN2レベルまでの学生が混在する授業集団での学習」である「日本事情科目」指導の実践的課題として、「『日本事情教授型』の授業だけでなく、コミュニケーション活動を取り入れ知識を整理する『日本事情発見型』の教育内容・教育方法を追及する必要がある。」と指摘している。筆者も外国人履修生が吉備国際大学入学後は日本人を中心とした様々な国の学生と共に学んでいくので、日本語によるコミュニケーション能力の向上が必要であると考えている。

本授業ではスマートフォンの使用を許可している。クイズなので、外国人履修生は正解をしたいという欲求があり、その欲求を満たすために正解がどうしてもわからなければ、スマートフォンを使っても良いことにしている。さらに、あくまでも主眼は正解の背景にあることや問題から派生する事象をお互いに日本語で話し合うことであり、話し合うために必要な情報を取得するのにスマートフォンを使うこともあるからである。

この話し合いを活発にしてくれ、日本語によるコミュニケーション能力の向上に手助けをしてくれるのがインドネシア人履修生である。インドネシア人

履修生の多くが外国人技能実習生として過去に日本で研修経験をしたことがあるので、そのときの経験を話してくれるからである。この点については当初筆者が想定していなかったが、授業を進める上で大きな効果があった。

例えば、「問題 岡山から東京へバスで行くと、何時間かかりますか。 1約8時間 2約9時間 3約10時間 4約11時間」というクイズで、答えは「3」であるが、この問題では正解が出た後、自分の住んでいる高梁市のアパートから東京にバスで行くにはどうすれば良いかを調べさせる。外国人履修生にはできるだけスマートフォンを使わせないで、お互いに日本語で話し合うようにさせながら「備中高梁駅でJR伯備線に乗って岡山駅に行き、岡山駅西口バスターミナルから深夜の高速バスに乗る。」という手順を導き出させる。この手順を導き出させた後に、技能実習生として以前来日したことがあるインドネシア人履修生が「私はたまに東京に遊びに行った。」と言って、東京のことを話し始める。すると、技能実習生として来日経験のある他のインドネシア人履修生も東京見物の話をし出して、初めて来日して高梁市しか経験していない外国人履修生と東京についての話し合いが毎学期展開する。その他にも日本の食べ物や生活習慣についてのクイズでも、技能実習生として来日した経験のあるインドネシア人履修生が日本での体験を話した後、初めて来日した外国人履修生と日本語で話し合う。特に「納豆」のことになると、毎学期話がたいへん盛り上がる。筆者は「東京のどこへ行き、どうだった?」「納豆は嫌い?好き?なぜ?何からできている?」等と外国人履修生に尋ねて話題を広げたり、母国語で話そうとするのを制止して日本語で話すことを促したりする役割を担う。

## (2) 20ページ前後の宿題

外国人履修生が履修する前述の8科目とは別に、

筆者は外国人履修生に漢字の「読み」「書き」、語彙、文法で構成するA4で20ページ前後になる分量の宿題を第1週目から第10週目までやらせている。宿題は1週間後に提出させ、筆者<sup>注3</sup>は宿題をチェックし、提出の翌週に特別授業として時間を設けて間違えた箇所を修正させている。筆者は「宿題提出一覧表」を作り、宿題の提出を本人の目の前で一覧表を使ってチェックしているためか、外国人履修生の全員が宿題を毎回提出し、かつ特別授業にも毎回出席する。

宿題の内訳は週によって多少違うが、漢字の「読み」が約25%、「書き」が約20%、語彙が約35%、文法が約20%の配分になっている。なお、2010年度春学期から2015年度春学期まで筆者が担当していた留学生別科の経験から、外国人留学生にとって助詞の使い方が難しいということを感じていたので、文法には助詞の問題を毎回入れている。

宿題は漢字と語彙で約80%を占めている。というのも、表1に示したように、外国人履修生は非漢字圏の学生が95.7%も占めており、非漢字圏の外国人履修生が日本語を学ぶ上で漢字は障壁になっているからである。また、外国人留学生の中でも中・上級レベルの日本語学習者が対象であるが、前田<sup>2)</sup>が「聴解には、一文の統語理解よりも単語単位の理解の方が重要であると考えられる。」「本研究の学習者は、語彙処理を中心に聴解を行っていたと考えられる。」と指摘したように、語彙は聴解にも重要な働きをするからである。

漢字の「読み」が「書き」よりも分量が多いのは次の理由からである。大学の授業では教科書、資料、黒板の漢字を読み、レポートや論文を漢字も使って書くので、漢字の「読み」も「書き」も同じぐらい重要である。しかし、レポートや論文を書く場合はワープロソフトを使う場合があるので、「読み」ができればレポートや論文は書けるからである。しかも、本学の外国人履修生は初級レベルであっても、

ひらがなやローマ字は習得して来日している。

### (3) 入学志望理由書の作成

大学の授業では教科書や資料等の「読み」とレポートや論文の「書き」が必要になる。外国人留学生の「読み」と「書き」の両方を向上させる日本語学習教材として京<sup>3)</sup>は新聞記事の活用を提唱している。小学校から大学まで国語教育等の一環として、新聞を教材として活用するNIE活動が盛んになっており、京のように新聞を活用することは外国人留学生の「読み」と「書き」の能力向上に役立つと思われる。しかし、京の授業は日本語能力が中級レベル以上の者を想定している。本学の外国人履修生は初級レベルが多いので、新聞の活用は実現が難しい。その代わりに、本学では外国人履修生全員の「読み」と「書き」の訓練になる入学志望理由書の作成がある。

外国人履修生は半年後に吉備国際大学の正科生となるために、入学試験を授業期間の第14週目ぐらいに受ける。そのために前項の宿題の終了後の第12・13週目に特別授業の時間を使って、外国人履修生は入学試験のための書類を日本語で作成する。

入学試験を受けるための書類には、入学願書、入学志望理由書、誓約書、健康診断書等がある。健康診断書を除いたこれらの書類を外国人履修生は日本語で書き上げるのであるが、入学志望理由書では「志望する学科で何を学びたいか」を200字以内で、「日本留学を決めた理由・留学中および卒業後の抱負等」を250字程度で書かなければならない。

入学志望理由書を書くには、入試広報室の職員から吉備国際大学の説明を聞き、日本語のパンフレットで志望する学科のことを読んでから、「学科の志望理由」、「日本に来日した理由、在学中に勉強を含めて何をしたいか、卒業後の抱負」を日本語で書かなければならない。しかも、入学試験に関わることなので、外国人履修生は全員が真剣に取り組むのである。

入学志望理由書は1週間かけて下書きをして筆者に提出し、筆者<sup>注3)</sup>の添削を受けてから清書をする。志望理由や在学中にしたいことについての外的なことを書いてはいけないので、下書きの時点で筆者<sup>注3)</sup>は外国人履修生に対してパンフレットのどこに興味があったのか確認（「読み」）の手助けはするが、書く指導はあまりしない。外国人履修生の日本語能力レベルは前述したように初級レベルが多く、初級レベルはN2・N3レベルに教わりながら下書きをする。しかし、N2レベルであっても、スムーズに書き進めることはできず、全員が苦勞して何とか下書きをする。受け入れ学科に受験生の日本語能力を知ってもらうために、筆者は大幅な添削はしない。入学志望理由書の清書後に書き上げた感想を外国人履修生に尋ねると、毎学期「日本語で書くのはいへんだった」というのと、「日本語の練習になった」という返事が返ってくる。

外国人履修生はお互いに協力して書き上げているため、文章構成の添削はごく僅かである。(そのため、グループ単位で同じような文章になるということもあるが。)添削せざるを得ないのは、助詞の使い方の間違いと深川<sup>4)</sup>らが外国人留学生のレジユメの分析で指摘した「話し言葉と書き言葉の混在」である。助詞の誤用は前述の留学生別科の頃から筆者は経験していた。また、外国人履修生は日本語で話すことは多いが、「書き」言葉による作文の経験が少ないため、「話し」言葉でそのまま書いてしまいがちになる。特に、「そのため」と書くべきなのに「それで」と書いてしまうように、接続詞に「話し」言葉を使いがちになる。

助詞については正科生として入学後に履修する日本語科目の授業で再度学習し、正しい助詞の使い方を習得することが可能である。しかし、「話し言葉と書き言葉の混在」及び「書く」力を養成することについては入学後の日本語科目の授業でもレポートや論文を書かせる時間を多くはとれないので、日本

語科目の授業のみでは難しい。深川<sup>4)</sup>らが指摘したように、「効率よく経験を通して学習し体得していくプロセスが必要であると思われる。」ので、大学入学後にいろいろな授業でレポートや論文を「書く」経験を積み重ねることによって体得し、「書く」能力を高めてほしいと考える。

### 3. まとめ

本学は外国人履修生が半年後に入学する吉備国際大学で日本語による授業を少しでもスムーズに受講できるように、日本語教育を実施している。そのために、筆者が担当する外国人履修生に対しては語彙、文法、読解、聴解中心の授業だけでなく、コミュニケーション能力、漢字の「読み」「書き」や語彙、作文による「書く」力を向上させる工夫もしている。

半期の授業期間でどれだけ日本語能力が向上したかを数字で提示することはできないが、大学の授業を受けるために少しは役立っているのではないかと筆者は思っている。ただし、今後の外国人履修生の増加によっては、今回報告した方法は適用できない

かもしれないと危惧しており、新たな取組みを考える必要がある。

#### 注1

筆者は全ての外国人履修生を担当しているわけではない。中には、アニメーション文化学部に入学を希望する外国人履修生もいる。この外国人履修生に対してはアニメーション文化学部が日本語教育を含めて独自の教育を実施している。また、心理学部に入学希望する外国人履修生もおり、この外国人履修生に対して、2018年度春学期から心理学部も独自の教育を実施している。

#### 注2

日本語能力試験のサイト内の「N1～N5：認定の目安」(<https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>)より引用

#### 注3

2018年度秋学期からは外国人履修生の増加に伴い、本学の満田先生に手伝っていただいている。

### 引用文献・参考文献

- 1) 横山博信, 朝日大学留学生別科日本語研修課程における「日本事情科目」指導の実践的課題, 朝日大学留学生別科紀要14号, P3-12, 2017年
- 2) 前田由樹, 中・上級日本語学習者の聴解力を予測する要因 — 語彙力, 文法力, 問題解決能力, 作動記憶容量の視点から —, 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第57号, P237-244, 2008年
- 3) 京 祥太郎, 外国人留学生のための新聞記事を活用した日本語学習教材の開発, 至誠館大学研究紀要第5巻, P123-133, 2018年
- 4) 深川美帆・深澤のぞみ・札野寛子・濱田美和, 外国人留学生と日本人学生へのアカデミック・スキル指導についての考察 — 演習型授業におけるレジュメの分析から —, 金沢大学留学生センター紀要第19号, P57-68, 2016年